

おれ勇者パーティーや  
めて野良になるわ

村人B

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

おれは勇者パーティーをやめて野良になる！

# 目次

第1話

—

1

第2話

—

23



## 第1話

「はあ？ アンタなに言ってるの？」

ベアトリスが目を細め、そ言った。ありえないものでも見るかのように、鋭く俺を睨みつけてくる。

なかなかの威圧感だ。歴戦の冒険者でも、ここまでの眼力を放てる者はいない。流石はベアトリスだと、俺は静かに感心した。

だが、伊達に俺もここまで彼女たちと共に冒険をしてきたわけじゃない。この程度で怖気づくほどヤワな鍛え方はしていないし、むしろ、ベアトリスの反応によつて反骨心が刺激され、鋼のごとき決意を得たと言つてもいい。

だから、改めて俺はその誓いの言葉を口にした。

「俺、このパーティーやめて野良になるわ」

彼女たちとパーティーを組んで、かれこれ数年ほどだろうか。王都にある小さな酒場から、アリスシアと共に始めたこのパーティーも、紆余曲折を経て五人にまで増え、なんやかんやで世界を巡り、気づけば、生きては帰れぬと言う伝説の地にまで挑むようになっていた。

ここは、別名「最果ての地」という、なんとも冒険心がくすぐられる名の荒れ果てた荒野なのだが、多くの困難を共に乗り越えてきた俺たちにとっては、さながら陽気な氣候の西海岸のようなもので、気分はまさにラストリゾート。砂漠の中のオアシスのように、前触れもなく出現した謎の集落も偶然見つけられたことだし、この乾いた空の下、進行方向先に立ち込める僅かな暗雲以外は、万事順調な旅路だと言えるだろう。

俺たちがいま囲んでいるテーブルの上には、この集落一番のシェフが腕によりをかけて作ってくれた料理が、ところ狭しと並べられている。まるで俺の門出を祝福しているかのような豪華な食事だ。質素儉約がオールウェイズなマイパーティーにしては、近年稀に見るアンビリーバブルなご馳走だが、これが彼女たちと共にする最後の晩餐かと思うと、なるほどこれ以上のものはないだろう。

そして、そんな肝心のパーティーとはいうと、せっかく俺が悩みに悩んで一念発起し大告白をかましたというのに、ビックリするどころかノーリアクションを決め込んで黙りこくってしまったっている。まるで世界が静止したかのように、みんなピクリとも動かない。

一体どうしたというのか。せっかくのごきげんな料理だというのに、このままでは冷めてしまうだろう。仕方がないので、俺は空気を一新するため、テーブルに置かれたままになっているグラスを手に取り、一気に中身を飲み干して見せた。うんまずい、もう

一杯！

横目でチラリ。パーティーメンバーはまだ固まっていた。

「……俺、このパーティーやめて野良に」

「いや、そう何度も言わなくていいから、ちゃんと聞こえてるから」

「そうか」

もしかすると緊張のあまり小声になっていて、良く聞こえなかったのではと思ったが、そうではなかったようだ。いくら気の知れた仲間同士だからといって、無視するのは良くないことだが、だからといってそれをわざわざ口にしない。俺は真の男なのでちゃんと空気は読むし、時として沈黙は美德であるということもすっかり理解しているのだ。

「ただ、アンタがいきなり変なことを言い出すものだから、ちよつとビックリしちゃっただけよ。えつと、それで？ 一体なんの冗談のつもりかしら？ このパーティーを抜けるですつて？ ジョークにしては笑えないわね」

当然だろう。これはジョークでもなくマジもんの本気話なので、笑えないのも当たり前である。どこかの売れないピエロじやあるまいし、真の男たるものこんな重要案件を冗談めいて言うはずがない。

「まさかアンタ本気で言ってるの？」

呆氣にとられたというか、未だ半信半疑といった様子でベアトリースが問う。その疑念を確信に変えるため、俺は三度みたひ同じセリフを言った。

「ああ、俺このパーティーやめて野良になるわ！」

エクスクラメーション！ 二度あることは三度あるとは言うが、まさかこんなセリフをこの短時間で三度も言うことになるとは……だが、仏の顔もスリーフェイスとは良くいったもので、三度目にして、ようやく彼女たちへと真意が伝わったようだ。そう、俺はこのパーティーをやめて野良になる。

再び長い沈黙。

ごきげんだったはずの昼食タイムは、まるで葬式か何かのように静まり返ってしまった。気持ちには分かる。俺だって昨日まで仲間だったヤツに、突然「やめる」とか言い出されたら、シヨックのあまり無言にもなる。だが、すでに覆水盆にノーリターンズ。今更吐いた唾は飲み込めない。俺はこのパーティーを抜けて野良に、つまりはソコの冒険者に戻ってみせる！

俺は依然として黙り込む彼女たちを、その自慢のつぶらなお目めでつぶさに観察した。ベアトリースは眉間を押さえ、シャルロットは腕を組み、セーラは呆然とした表情を浮かべている。アリシアは普段から無表情なので、一見したところ大した変化は見られないが、真の男である俺のミリキにかかれれば、よゆうで見抜くことができるだろう。



じろり。アリシアの表情筋が二ミリほど痙攣している！　アリシアはわずかに動揺しているようだ！

うむむ、よもやアリシアにさえもここまで動揺されるとは、正直言つて想定外デス。てつきり、普段の俺への扱い方からして、ここで唐突に別れを切り出しても「あ、そ、じゃあねバイバイ」くらいのあつさり塩対応でおさらば御免、と予想していたのだが、意外にもこんなしおらしい対応を見せられると、何だか無駄にドギマギしてしまう。

「一体どうしたのか？」

「いや、それはこっちの台詞よッ!!」

憤慨したベアトリスが勢いよくテーブルを叩いた。ガンッ！

するとその拍子に彼女の荒ぶる魔力が溢れ出て、テーブルがバーン！　魔力がギューン！　料理がドーン！

見事なまでに俺の最後の晩餐が宙を舞い、ごきげんな昼食が凶暴な弾丸へと変貌する。俺はこのパーティーの「肉壁」という名の「盾役」なので、これが最後の一仕事と言わんばかりに襲いかかる脅威全てを一瞬にして見極め、甘んじてその身に被弾、彼女たちへの被害を最小限に抑えてみせた。

流石はベアトリス、今日も魔力とツツコミのキレがハンパない。だが、せつかくの料理を台無しにしてしまうのは頂けない。食べ物を粗末にする者には、もったいないお

化けが出るぞ。俺はベイヴの頃そう母親に教わった。おまえも昔お母さんに教わらなかったのか？ あとで作作ってくれたシエフに謝っておくように。

「それよりもなによ突然抜けるって！ 全然意味分かんないし！ 真剣な顔して、大事な話がある」って言うから覚悟して聞いてみれば、なに？ なんなのコレ!? アホなの？ 死ぬの!?!」

「落ち着けベアトリス、正しくは「抜ける」ではなくて「やめる」だ」

真の男たるもの、言葉は正確に使わなくてはならない。

「どっちだって一緒じゃない！ 減らず口の減らないヤツね！」  
「まあまあ彼の言う通りだぞベアト、少し落ち着け」

見かねたシャルロットが仲裁に入ってきた。流星はパーティーの「お母さん」的なポジションの人。ナイスフォローだお母さん。

「貴公も少し黙れ」

お姉さんでしたね、ハイ。

「でも、これが落ち着いてられるかってのよ！」

怒り心頭といった様子でベアトリスが吠える。

「シャルだつて分かってるでしょ？ こっちだつて色々あるつてのに、言うに事欠いて俺、このパーティー抜ける」よ？ なにここまで来て寝ぼけたこと言ってるのって話よ

!

「そう言われると肩身が狭いのだが、だからと言ってこのまま折れる気も曲げる気も毛頭ない。俺の意思は鋼鉄よりも堅いのだ。」

「それともなに？ シャルはこのままコイツが抜けてもいいって言うの？」

「そうは言っていない。だが、そう熱くなつていては説得できるものも説得できないと言っているんだ。それに忘れたのか？ 彼は「やる」と言ったからには必ず「やる男」だ……」

「そう言うシャルロットが俺に目配せをしてきた。俺は聡い男なので、褒められたのだと直感で理解し、胸を張った。えっへん！」

「ベアトリスとシャルロットが息を合わせてため息をつく。なぜこのタイミングでため息をついた？ オイ二人とも、駄目だこりやと言わんばかりに目を覆うんじゃない。」

「とはいえ、どうして「やめる」という結論に至ったのか、その理由を詳しく聞かせてはくれまいか？ もし我々に改善できる点があるならば改善するし、譲歩できる点があるならば譲歩しよう。我々としても、このまま「ハイそうですか」と引き下がるワケにはいかないのでな」

「ハッ！ そ、そうです！ なんでやめたいのか、ちゃんと理由をお聞かせください！」

私たちに何か不満でもあるのですか？」

明後日の方向に精神をジョグインさせていたセーラが、ここぞとばかりに意識を取り戻し詰め寄ってきた。ドウドウ落ち着け、ビジュアル的に立場が逆だ。

彼女たちの問いかけに、俺は目を閉じて逡巡した。

「別に、俺はこのパーティーに何か不満があるわけじゃない……」

ましてや最近冒険者界限で流行しているという『理不尽にパーティーメンバーから追放される』というビッググウェーブに、男らしく便乗してみたいと思ったわけでもないぞ。

俺は空を仰ぎ見た。どこまでも青い空の端に、何やらドス黒い悪雲が立ち込めている。まるで俺の将来を暗示するかのようだが、だからといってこのまま怖気付いて立ち止まるわけにもいかない。この選択の先に、何が待っているのかは分からない。だが、行ってみなければ分からない。迷わずいけよ、行けばわかるさ。そう心の中のアントニオが俺にサムズアップした。

「……ふと思っただ」

そう言っただけはアンニョイな雰囲気醸し出した。夕陽に照らされた場末のPubで、スコッチ片手に語り出しそうな、なんかそんな感じの固茹で卵ぽい雰囲気だ。まあ俺はとある事情で永久禁酒状態で今は昼だが、そんなことは些細なことで重要ではない。

「そうだ、野良になろう……っつて」

そう、さながら京都にでも行くかのように……

俺がそう宣言した瞬間、まるで世界が凍りついたかのように、パーティーメンバーたちが再び固まった。そんな、まさかこの俺も「入門者」だったとは。これにはD I Oもジョータローもビツクリ。今まで気づけなかったが、まさか俺が時を操る能力者だったとは又アア——ビンタッ!!

猛烈な衝撃が俺の頬を貫いた。さながら戦闘機に突っ込まれたかのような、あるいは大魔法クラスの魔力を手のひらサイズに圧縮して放ったような、そんな想像を絶する衝撃だ。勢いのあまり首がねじ切れそうになったが、俺は持ち前のタフネスさでなんとか耐え抜いた。

「ふっつっつぎけんじやないわよッ!」

間髪入れずベアトリスの怒号。その光り輝く右手には、これまで感じたこともない膨大な魔力が籠っている。さながらシャイニング・ゴッド・フィンガー。並みの男なら既にゴー・トゥー・HELLしているレベルの衝撃だったのだろう。だが、俺とて伊達に一度あの世を見てはいない。地獄から舞い戻りし男とはまさに俺のこと。この程度の衝撃、耐え抜いてみせることなど造作もない。

「なに? なんなのそのふざけた理由! “ふと思った”とか馬鹿にするのもいい加減

にしなさいよ！ このアホ！ スットコドッコイ！ ああもうホントコイツ無駄に堅いんだから……」

涙目で手のひらをさすりながら、ベアトリスが言う。

「お、落ち着いて下さいベアトさん！ 流石にもつとちゃんとした理由があるはずですね、そうでしょう？ そうですよね？ お願いだからそうですって言って」

懇願するような瞳でセーラ。やめろその視線は俺に効く。だが、そんな瞳をされても出てくるものは何もない。俺はこのパーティーをやめて野良になる。それこそが真実で真実はいつも一つだ。

「そ・う・で・す・よ・ね？」

「……モチロンだ、当然ちゃんとした理由が他に存在する。そう、そうだな……俺はある時、ふとこう思ったんだ——」

そう言って俺はアンニョイな雰囲気醸し出し「それはもういいです」あ、はい。

「俺はふと思った——あれ、このパーティーもしかして、世界を救うとかなんかそんな感じの、勇者的なパーティーなんじゃね？ て……」

刹那の静寂ののち、稲妻のような衝撃がパーティーメンバーに走る。具体的に言うなれば、ギクウツとでも言いたげな効果音が鳴り響きそうな衝撃だ。

「ギクウツ！」

だからといってわざわざ言う必要ないぞアリシア。

「……そう」

だがノリが良いのは嫌いじゃないアリシア。どこぞの魔法使いさんも見習って欲しいものだなアリシア。

さて、まさかの衝撃的事実により、あれだけ威圧感マシマシだったパーティーたちが、ちよいとばかりし気まずそうな雰囲気へと変貌していった。さもありません。まさかこのパーティーが伝説の勇者パーティーだったとは、かの名将リハク殿の目をもってしても、見抜けなかっただろう。

だが、真の男である俺は気づいてしまった。気づいてしまったのだ。というか、ぶっちゃけどんな鈍感節穴野郎でも、俺と同じ立場に立たされたなら気づいていただろう。それくらい、状況証拠的なアレやコレやが揃っていた。

曰く付きの名剣を偶然という名の必然みたいな感じで入手してみたり。

太古に封印された大魔法を習得しに行ってみたり。

聖地巡礼と称して各地の精霊から祝福を得に行ってみたり。

都合よく伝説の勇者パーティーの装備を手に入れてみたり。

これ見よがしにそれを着てみたり。

そういつたとき決まって俺の分は無かったり。

各地のお偉いさんがやけにフレンドリーだったり。

各地の悪いヤツらに因縁をつけて退治に行ってみたり。

唐突に世界の果てにある曰く付きの荒野に行こうとか言い出してみたい。

なんか進むに連れてパーティーメンバーたちが意味深にピリピリしだして、クライマックス感を醸し出してみたい。

これだけあれば気づくなって方が無理があるだろう。

そんなわけで俺は、既に彼女たちの真の正体もマルツと見事に見抜いていた。

ベアトリースはかの有名な「大魔道士」の弟子にして「賢者」

シャルロットは失踪していた亡国の第一王女にして「姫騎士」

セーラはキルステン教の「聖女」にして天使。

そしてアリスは、何を隠そう、あの“伝説の「勇者」の子孫にして生まれ変わりときたもんだ！ どうだ凄いでフルコンボ！ 俺のパーティーメンバーの正体がスゴくてヤバイ！

「……そりゃあ、みんな矢鱈と高スペック女子なわけだよ」

視線を逸し呟く。

こして改めて考えてみると、俺以外のメンツのスペックがハイレベル過ぎてヤバイ。みんな高貴な生まれか立派な血筋の持ち主ばかりだし、我と彼のカタログスペックの隔



たりが、マリアナ海溝レベルで深刻だ。

俺は辺境も辺境のしがない山村出身で、両親も至って平凡な普通の猟師だった。物心がつく頃から狩りか木こりか筋肉を鍛えることばかりをしてきたが、言わば、どこにもいる普通の少年というヤツだった。その後、一六の時に一念発起して村を出るが、特に何かを成すワケでもなく、ただひたすら斧をブン回してきた中年……じゃない中堅冒険者——それが俺の正体である。

確かに俺は、自他ともに認めるタフでナイスなガイズだが、だからといって、彼女たちのようなビッグネームと肩を並べられるほど、真の男として成熟できているワケでもない。それが発覚してしまった以上、もはや彼女たちとパーティーを組み合わせることはできない。

「なあ、セーラ」

「は、はい」

「そんな何者でもない俺が、おまえたちと一緒にこのまま冒険を続けられると思うか？」

「そ、それは……」

「言いよどむセーラ。」

良いさ分かつてる。たとえ聖女さままでも、言いづらいことくらいあるもんな。俺と彼女たちでは、傍から見ても全く相応しくない。さながら月とスツポン。いや、ビジュア

ルのに美女と野獣か……道理で、行く先々で俺だけ不審者を見るような目つきで見られるわけだ。

「何せ、俺に付けられた肩書きといえは——」

「村人A、木こり、田舎者、蛮族、荒くれ者、野人、なんか臭そう、なんで斧使ってる？ あとそれから……」

「又オオオオオオオオオオ」

抉るようなアリシアの言葉。流石は選ばれし勇者殿。的確にヒトの急所を突く。クリーンヒット、ハットトリック、ナイストライだ。

そう、俺は肩書きときたら、未だド田舎村出身アラサー冒険者の域を出ていない。英雄クラスの彼女たちと比べると、見劣りするってレベルじゃねー。

「ちよつと、経歴詐称は良くないわ。アラサーって言っても正確には30歳じゃ——」  
「どわああああ、やめろ！ 四捨五入すれば30なんだから問題ないだろう！ これだから計算に煩い魔法使いは困りますね」

複雑な年頃であるとなぜ察せられないのか。ボブは訝しんだ。

「だが、我々はこれまで一度も、貴公のことを肩書きなどで判断したことはないぞ。これまでそうやって共に冒険をしてきて、これからもそうしていく……そういつたワケにはいかないのか？」

問いかけるシャルロット。

「……ああ」

俺は絞り出すように呟いた。

「この先、これまでと同じように冒険を続けられるのであればな……」

パーティーメンバーが息を飲んだ。その反応を見て、俺は確信を得た。なるほどやはりそうだったのか。

この世界に「勇者」がいて、アリシアがその「勇者」で、このパーティーが「勇者パーティー」ならば、当然の如く「あの存在」もこの世界に存在しているはずだ。

「なるほどつまりは『魔王』というわけだ……」

魔物たちの王、暗黒の支配者、闇の霸王——様々な肩書きで語られるあの伝説的なヴィランが、この世界にも存在しているのである。

コーラーゲツプならぬ勇者Ⅱ魔王。なんとという名推理かQED。これにはホームズもおったまげ。

「そう、気づいてしまったのね……そうよ、実は私たちは——」

ベアトリースが何か言おうとしたが、俺はそつと手を上げ静止した。

みなまで言うな分かっている。真のタフガイならば、言わずもがな全てを理解できてしまうものだ。だからお前はもう何も言わなくていい。

俺は別に、今まで秘密にされていて傷ついたとか、俺だけ仲間はずれだったのかよとか、信頼を裏切られたとか、信じているならば打ち明けるべきだったとか、この嘘つきの泥棒猫めとか、そんなお決まりの台詞を言って彼女たちを批難したいわけじゃない。こんなこと、よくある話さ。ヒーローが仲間内に正体を隠して秘密にするってのは、この世界ではあんまり聞かない話かもしれないが、俺が前にいた世界じゃごくありふれた展開の一つだった。

だから、断じて俺は、洋ドラのヒロインみたいにヒステリーを起こしてパーティーをやめると言い出したわけではない。断じて。

「じゃ、じゃあー！」

「でも、だからこそダメなんだ……！」

俺はそうきつぱりと言った。

「このままでは俺は後世に、勇者パーティー魔王を討伐す、その内訳は、勇者、聖女、姫騎士、賢者、村人Aの「村人A」として名を残すことになってしまう。それだけは、絶対に避けなければならない、絶対にだ！」

せめて名を残すなら、村人Aではなく、町民Aくらいにはカブれてからだ。可能ならば都会民Aがいいが、最高なのは真の男Aで、なんなら真のタフガイAでもいい。しかし、俺はまだその領域にまで達していない。俺はまだまだ未熟なマンモー二なのだ。

だから、これ以上俺はお前たちと共に歩むことはできない。

「あつっつっきれた!!」

俺の悲痛な気持ちとは裏腹に、ベアトリースは憤懣やるかたない様子で咆哮した。

「なに？ 何なのそれ？ あーだこーだ長つたらしく言い訳じみたことを言ったかと思えば、結局のところ、ただ名声が気になるだけだって言うの？ 今は世界が滅びるか滅びないかの瀬戸際だっていうのに、アンタは自分の名が後世にどう伝わるか、そればかりが気になるって言うんだ！」

咆哮と共に強烈な魔力。あわやまたピンタが飛んでくると身構えたが、そんなことはなかった。代わりにベアトリースは涙目になっていた。滅多に見せない表情で瞳を麗していた。咄嗟に目を拭って彼女は続ける。

「アンタには感じ取れないだろうけどね、今、世界は「闇」に覆われようとしていて、今にも崩壊寸前なの。この荒野の先にいる復活した「闇の帝王」が……って、いちいち一から説明するのも面倒くさいのよ！ 兎に角！ 今更パーティーを抜けるだなんて、私は断固として反対よ！」

そうは言ったものの、真の男たるもの二言はないわけで、今更引き止められても、はいそうですかと止まるワケにはいかない。

何度も言うが、俺はこの勇者パーティーをやめて野良になる。これは決定事項なの

だ。

「……そうか、決意は固いようだな」

「シャル!? あなたまさか、裏切るつもり?」

「いやそうではない。だが、考えてもみるベアト。あの彼が、あの、体だけでなく意思までも無駄に堅いあの彼が、我々の言うことを素直に聞いたことが、これまで一度でもあつたか?」

ほとんどあつた。

「……そう、多くの場合、彼は我々の言うことをよく聞き入れてくれた。そんな彼が、ここまで頑なに「やめる」と言うのであれば、私は快く送り出すべきだと思う。たとえ、こんな状況下であつても、そうすべきだ。それが、これまで我々についてきてくれた、彼に対するせめてもの礼儀だ」

「そ、それは……」

「それに、”ヤツ”の討伐に彼が必要なのかというと、必ずしもそうではない。それくらい、ベアトにだつて理解できているはずだ。いやむしろ、いない方が都合がいいとまで言える……そうではないか? ベアトリース」

「それは、そうかもしれないけど……」

さつきまでの勢いを完全に削がれ、段々と俯いていくベアトリース。そして、そのま

ま暫く間があつたのち、ぼそぼそと呟いた。

「わかつた、わかつたわよ。もう私はアンタのことを引き止めやしないし、説得もしない。どこへなりとも、好きにすればいいわ」

それから顔を上げて笑みを浮かべる。

「そして、どこか私たちの預かり知らぬ土地で、一人ぼっち寂しく彷徨い歩き、このベアトリース様の有り難みを噛み締めながら、孤独に野垂れ死ぬといいのよ」

その物騒な物言いに反して、ベアトリースが浮かべた笑顔はあまりにも清々しいものだったので、思わず俺は「望むところだ」とニヒルに返してしまった。

「フン、相変わらず人の気も知らないで……でもまあ、それがアンタらしいちゃアンタらしいのかもね」

ハハハ、こやつめ言いおるわ。

「ほ、本当に、本当にこれでお別れなんですか？」

今度は涙を浮かべてセーラ。いつものように、無自覚のまま俺の弱いところへの確にボディブローを抉り込んでくる。だが、今回ばかりはああ本当だ。

しかし心配めされるな。昔、涙の数だけ強くなれるよと歌ったタフな女性がいたが、実はこれは真実だ。その歌の通り、涙を流すたびに俺は心身ともにマツチヨな男になれた。シユワちゃんも涙を流す理由を知った。だから、セーラもその涙の数だけ強くマツ

チヨになれるはずだ。アスファルトに咲く花のように。

「クス……相変わらず変な人ですね」

よせやい照れるだろう。褒め言葉だ。

「私は……」

誰かがそう呟いた。それがあまりにも小さな声だったので、一瞬誰だか分からなかったが、デビルイヤーは地獄耳を持つ俺には直ぐに判別することができた。アリシアだ。

起伏がなく、感情の籠らない声はどこか無機質に感じられ、機械のような印象を抱かせた。だが俺は知っている。無感情に見えるのは上辺だけで、彼女ほど内側に熱い魂を持つた人物はいないと。

「あなたに出会えて良かった。駆け出しの時、右も左も分からなかった私に、手を貸してくれたのはあなただけだった。あなたとの冒険はとても楽しかった。偶にヘンなことをいうヒトだったけど、どんなに辛い夜も、どんなに苦しい朝も、あなたとなら乗り越えられた。どんなに手強い相手でも、あなたとなら打ち倒すことができた。あなたと冒険ができて本当に良かった。だから、最後にあなたの口から本当の心を聞きたい——」

本当に私たちのパーティーを抜けちゃうの？

だがここまで饒舌になるとは予想外だ。何この子、かつてない程にめつちや喋るじゃん。



「……そうだな」

問われて俺は目を瞑り振り返る。アリシアたちと共に駆け抜けた、あの初々しくも楽しかった冒険の日々を……。

確かに辛いこと、痛いこと、苦しいことも沢山あった。主に肉壁として戦った日々とかがそうだが、それ以上に、楽しいことや嬉しいことがいっぱいあった。たつた二人から始まった冒険は、ぶつかり合ったり、いがみ合いながらも、一人また一人と増えていき、最終的には五人のナイスガイズにまでなった。

みんなと共に過ごした冒険の日々を、俺は一生忘れないだろう。北の街で見た、満天の星空に輝くオーロラ。砂漠の先で見た、古代遺跡の残滓。空飛ぶ浮島で見た、あの夕日の美しさ。海の都で見た、水平線より昇る朝日の眩しさ。それらも、俺は一生忘れないだろう。忘れられるはずがない。

でも、だからこそ。

「ああ、おれ勇者パーティーやめて野良になるわ」

潔くキツパリと、俺はそう言い切った。

斯くして——俺は勇者パーティーをやめて野良になった。

久しぶりに野良になった俺は、野良らしくハードボイルドにこの場を去るため、振り返ることなく西の荒野へと姿を消した。なぜ西だったのかというと、ちようど足が向い

た先がそっち方面だったからだ。

こうして俺は荒野を彷徨い歩き、程なくして、古めかしい遺跡のような場所にたどり着く。そしてそこで出会ったなんか闇っぽい変なヤツと死闘を繰り広げ、辛くも打ち倒し、勝利の雄叫びをウホウホすると、さらなる新天地へを目指して歩を進めていった。

願わくば、彼女たちに負けないくらいのスngoイ肩書き目指して……。

## 第2話

物心がつく頃から、ずっと『勇者』としての使命を背負わされてきた。

みんなに期待され、歓迎されるのは嬉しかったけど、私という存在を『勇者』というフィルターを通してでしか見ていないようで、なんだかもどかしかった。

『勇者』という肩書きは、私の人生を大きく縛った。物心つく頃には孤児院に預けられていた私には、家族はなく、口下手で、人付き合いも苦手だったから友達もろくにできなかった。

私が勇者の生まれ変わりだと発覚してからは、さらにそれに拍車がかかり、さながら私は闇の帝王を倒すための『兵器』になったようだった。

そんな時だ、“あの人”と出会ったのは。

「なんだお前、クエストの受け方も知らないのか？」

旅立ちの日、王様から100ゴールドとヒノキの棒だけを持たされて途方に暮れていた私に、唯一声をかけてくれたのがあの人だった。

「ん？　そもそもお前、冒険者登録もしてないじゃないか。ならルーキーだな？　さっさと登録してこいよ、やり方は分かるのか？」

口下手な私に、あの人は物怖じせず話しかけてくれた。

「隣町まで行く？　ちようど俺も同じ方向だし、なら一緒に行くか！」

剣を振るってばかりだった私に、狩りの仕方を教えてくれたのもあの人だった。

「野生の魔獣つてのは案外臆病なんだ。滅多なことじゃ人前には出てこないし、そんな殺気立ってちや逃げられちまうぞ」

「魔獣たちだつて馬鹿じゃないんだ。だから狩りをする時はよく観察し、慎重になれ。闇雲に剣を振つても当たるもんじゃない」

私の知らないことを、私に教えてくれたのもあの人だった。

「シピーラビットは魔獣の中でも比較的解体が容易な部類だ。まず後ろ足の付根を裂いてだな……」

「火を起こすのに魔法を使うのもいいが、自力で起こす方法も知っておいたほうがいいぞ。知っているのと知らないのでは大きな違いだ」

「おい、やツたなアリシア宝箱だぞ！　これで俺たちも億万長者だ！」

「まさか宝箱が偽物だったとは思ってもよらなかつた……残念だったなアリシア」

「装備は常に整えておけアリシア。ん、俺？　俺は問題ない。なにせ俺はタフガイだからな！」

「まあ、たまにはこんなこともあるさアリシア、気にするな次がある」

「おい、アリシアぼーつとしてるな俺がピンチだ、助けてアッー！」

いつかあの人に、なぜ冒険者になったのか聞いたことがあった。

「知らないもの、見たこともないもの、聞いたこともないもの、味わったこともないもの、そういったものを見つげに、俺は冒険者になったんだ」

どこまでも自由なああの人の生き方が、私は羨ましかった。

使命なんて投げ出して、あの人のように生きてみたかった。

それが無理だと分かっていながら、分かっていないふりをして、あの人についていった。

私が『勇者』であることは、あの人には黙っていた。騙しているようで気が引けたが、言ってしまうえばこの関係性が崩れてしまいそうで、それが怖くて言えなかった。

二人きりの冒険は楽しかった。ずっとこんな日々が続けば良いと思っていた。少なくとも、私が闇の帝王を倒す、その日までは……。

「はじめましてセーラといいます！ よろしくお願ひしますね！」

でもそんなことはなかった。人の良いあの人のことだから、直ぐに新たな仲間ができた。

最初は気が狂いそうだった。それが『嫉妬』という感情だと知ったのは、随分と後になつてからだつた。

それでもあの人を通じて次第に彼女とも打ち解けていき、同じ使命を背負った者同士だと判明してからは、私たちは初めての友達になることができた。狭量だったのは私の方だったのだ。

「貴殿が『選ばれし者』か……「ヤツ」を倒すのに相応しいかどうか、試させてもらおうぞッ！」

それから旅の中で色々なことがあった。

出会いや別れがあり、苦しいことも辛いこともたくさんあった。

「アンタたちが噂のパーティー？ どのいつもこいつも冴えない顔ぶれね」

最初は敵だった人とも、戦いを経て分かり合えることができた。

悪いことばかりではなく、良いこともそれ以上にたくさんあった。

それらはやがて、私の中でかけがえのない大切なものになり、無色だった私の人生に彩りを与えてくれた。

「おい見ろアリシア、オーロラだ、オーロラだぞ！ ハハ、スゲー綺麗だな初めて見たわ！」

そしてそこにはいつもあの人があった。

勇者である私に『知恵』を授けてくれたのは、あの人『知識』だった。

勇者である私に『感動』を教えてくれたのは、あの人『ひたむきさ』だった。

勇者である私に『勇氣』を与えてくれたのは、あの人の『優しさ』だった。

旅の中で出会った私たち四人は、『光の巫女』と呼ばれる存在——この世界にはびこる闇を振り払い、あまねく光で照らしだす——そんな使命を帯びた者たちだった。

私たちは運命と呼ばれる見えない“十二か”の力によって、出会うことが宿命づけられていた。

でも、あの人だけは違っていた。

あの人がだけが本当に何者でもなく、本当に何者でもないただの冒険者だった。なんの使命も宿命も持たされていない、ただの人間だった。

それなのにあの人は、ずっと私たちと一緒にいてきてくれた。それが、ただただ嬉しかった。

だから私たちは、そんなあの人の優しさに甘えて、最後まで本当のことを何も伝えられず、最期の戦いにまで来てしまった。もしかすると、一種の無理心中に近い気持ちがあつたのかもしれない。それでも、互いに最悪でもあの人の命だけは守りきると、そう私たちは固く誓い合っていた。

だから、ここが最期と決意したあの場所で、全てを打ち明けようとした時、あの人がおもむろに口を開いて言った言葉に、私は耳を疑った。

「おれ勇者パーティーやめて野良になるわ」

俺はあれからあてもなく荒野を彷徨い歩き、西へ西へと進んでいると、突然謎の深い霧に包まれたかと思うと、気づけばある不思議な街へと辿り着いていた。

そこは、古めかしい暗黒街とも言えはいいのだろうか……街は常に雨が降り、濃霧が立ち込め、街灯が妖しく輝いている。まるで常夜の都市のようなダークサイドの空気が立ち籠めていた。

西といえは西部、西部といえはWESTERNだが、外観は違えど、この街も同じような危ない雰囲気醸し出している。見た目はLONDONだが、危険度言えば生前のヨハネスブルグ、もしくはMEXICOだ。

この街はそんなじよそこのマンモーンでは裸足で逃げ出すような危険な街だ。ここでは少しでも油断した者から骨までしゃぶられ、ケツ毛も残らない。MEXICOでは砂漠に生えるサボテンがおまへの墓標だが、ここでは干からびた糞の山がおまへの墓標だ。俺はそういった心持ちでこの街に入った。

俺はまずPUBに向かった。新しい街に来たらまずPUBへ向かうのが冒険者の慣



わしだ。なければBARでもいい。間違ってもClubには行ってはいけない。そんなところに行くような軟弱野郎では、このさき蚊ほども生き残れないだろう。

PUBは直ぐに見つかった。西部劇風の小汚いPUBではなく、ちゃんとした英国紳士風のPUBだ。だが、見た目が英国風だからといって、中身まで紳士しているとは限らない。気を抜けば一瞬にして骨抜きにされ、ゴートウーHELとなるだろう。俺は慎重な面持ちで扉を開いた。

中にいた客は、一見しただけでも一筋縄ではいかないようなヤツらばかりだった。角が生えている者、翼の生えている者、鱗に覆われた者、鋭い牙を持つ者、みな筋骨隆々で逞しい。見事なタフガイたちの集団だった。

見たところ俺のようなヒューマンタイプの人間はいないようで、ほとんどが亜人か獣人で構成されている。皆、賭け事か酒を嗜んで葉っぱをやっていた。アリシアたちと冒険していたころは、終始ハートフル冒険ファンタジーといった様相でのほんとしていたが、ここではハードボイルド・MEXICO・ファンタジーが幅を利かせているらしい。

俺が店に入ると、瞬間、場の空気が一気に冷めていった。歴戦の古強者たちが鋭く俺を射抜き、品定めしてくる。元勇者パーティーと言えども所詮村人Aでしかない俺は、この街ではまだまだ生まれたてのベイヴというワケか……。

突き刺さる視線の中を、俺は堂々と進んでいった。こういった視線に晒されるのは久しぶりだ。聖職者や未成年がいた前パーティーでは、こういった危険が危ないPUBにはいけなかったので、この肌を刺す感じ、どこか懐かしくて心地よい。

カウンターにつくやいなや、パーティーに向かって注文をする。

「Beerを」

俺は酒が飲めないが、これは挨拶のようなものだ。酒はあるか？ 友達になろうじゃないか。

「……あんた人間族か？ あんたみたいなヤツに出す酒は、ウチにはないぞ」

「そうか……じゃあミルクをくれ」

酒は出せないのだろうか？

店中が笑い声に包まれる。力に自身があり、ヒトを小馬鹿にしたヤツら特有の笑い方だった。冒険者になって日の浅いマンモーニならここで激怒もしただろうが、俺はいずれ勇者と肩書きを並べる村人Aだ。この程度の挑発など、そよ風みたいなものである。

タフガイたちがひとしきり笑い終えると、一人の男がおもむろにこう言った。

「良いじゃねえかマスター、くれてやれよ」

パーティーは慚然とした表情を浮かべると、やがてそのまま無言で作業にとりかかった。

「……ほらよ、ミルクだ」

ドンツと差し出された「ミルク」を俺は見つめる。

薄い白濁色の謎の液体が、グラスの中で揺れていた。なんの乳かは検討もつかないが、そもそも乳である保証すらない得体のしれないドリリンクだ。

ピリピリとした空気が肌を刺す。あからさまに歓迎されていない。この感覚は久方ぶりだ。やはりお上品も結構だが、冒険者稼業つてのはこうでなくてはいけない。

薄い白濁色の謎の液体を再度見る。どう見てもまともな飲み物には見えない。やせっぽっちの軟弱ボーイなら、ビビって尻尾を巻いて逃げているところだろうが、俺は真の男を目指す心も体もマッチョなメンズなので、怯むことなく一口でそれを飲み干してみせた。

この世のものとは思えない味がした。が、仲間をして「兵器になる」と言わしめたシャルロットの料理を、フルコースで完食しきった経験のある俺には尻でもないわしつかりと口内で転がしてゴクリと飲む。

タフガイたちが息を呑んだ。バーテンダーを見れば、彼は青ざめた顔をしていた。

グラスをカウンターに叩き置き、口を拭ってバーテンダーに言う。

「もう一杯だ」

今度は歓声があがった。仲間として受け入れられたのだ。

これが冒険者流『アイサツ』というものである。こういったヨハネスブルグさながらの過酷な環境下では、必要な儀式なのだ。

ここのタフガイたちはMEXICOに聳え立つサボテンのように孤高だが、決して孤独ではないということだろう。真の男でなければ何を言っているかわからないと思うが、つまりどういふことかという点、『ラブ&ピース』、つまりはそういうことだ。

この後、2杯目のミルクにはどうやらアルコールが含まれていたようで（もしかしたらだが1杯目にもだが）、危うく俺の原初の獣性が開放されかけたが、流星は歴戦のタフガイどもと言うべきか、店が半壊する程度で済みなんともなかった。

この街の住人はみんな気の良いヤツらばかりだ。見た目はさながら翼の生やしたデーモンか、刺青を入れまくったサイコパスのようで冒流的だが、中身は人間と大差はない。

カレらを外見で鬼だの悪魔だの罵るのは、心も体も軟弱なイエローモンキーがするこ

とだ。真のYAMATO男児なら、そんなことしない。俺の魂の故郷でも先生がこう言っていた——ヒトを見かけて判断してはいけません——実にナイスな助言だと今でも感心している。

差別や偏見をするのは、しなびたキノコのようなヤツがすること、エリンギのようにそそり立つタフな男がするもんじやない。つまりはラブ・アンド・ピース。これにかぎる。

俺はこの街にしばらく滞在することにした。この街では俺の持っている『ゴールド』ではなく、『デル』といった通貨が流通しているようで、ただでさえ懐事情の寒い俺は一文無しのスカポンタンとなり、このままでは、PUBの修理代どころか明日の生活費すらままならない、極貧状況にまで追い込まれてしまった。

つまりは今の俺は丸裸も同然であり、人の往来で恥ずかしげもなく全裸で仁王立ちしているHENTAIに等しい。俺は筋肉は鋼のように強靱で、どこに出しても恥ずかしくないHOTな腹筋を持っているが、だからといって露出狂の類ではない。早急にしかるべき衣類を着込み、TPOを弁えなくてはいけない。

俺はPUBで知り合った男たちに、『ウオーカー』という仕事を紹介して貰った。

『ウオーカー』とは、依頼を請け、任務をこなし、報酬を得ることで生計を立てる者たちの総称で、その有り様は冒険者に酷似している。要するに俺にうってつけのJOBとい

うことだ。

現在この街では様々な問題が多発しており、ウオーカーの仕事は掃いて捨てるほどある。更には東方に遠征中という、王様とか領主様とかなんかそこら辺の偉い人が、病死だか暗殺だかで急死してしまい、ちよつとした混乱の渦中にあるそうだ。とんでもない事態だが、ピンチの中にチャンスあり。戦国時代さながらの群雄割拠な様相は、俺のようなスngoイ肩書きを求める者にとって、またとないチャンスとなるだろう。

ウオーカーの窓口は冒険者ギルドよろしくPUBにあつて、俺はその従業員兼ウオーカーとして再スタートすることになった。

眼下では、多くの民衆が私たちを祝福している。

誰も彼もが笑顔で、歓喜の声を上げていた。

私たちはそれに手を振って応えた。本当に称賛されるべき人は、もうここにはいないというのに……。

アイツがああ場所でアホなことを言い出した時、最初は焦りもしたが、内心ではホツとしていた。これでアイツを失うこともなくなると、馬鹿みたいにそう思っていた。

そして、その結果が「コレ」だ。

私たちは結局おめおめと生き残り、代わりにアイツを失った。

生きているのか死んでいるのすら分からない。ただ「あの」惨状を見る限り、とてもじゃないが生きてるとは思えない。事あるごとに『タフネス』とか言っていたアイツなら、もしかすると……なんて思いもするが、それでも、それはだいたい自分の悪い賭けになるだろう。

少なくとも、私たちがあのと搜索した範囲では、アイツの「死体」は見つからなかった。ただし、「生きている」という「証拠」も、同じく見つからなかったが……。

「なんか、終わっちゃったわね……」

専用に用意された王城の一室で、私は机に伏してそう言った。

かつて想像していた結末とはえらい違いだ。もつとこう、劇的な何かがあると思っていた。

私は虚脱感に襲われていた。命を賭して成し遂げると誓ったことを、横やりから強引に奪われたのだから当然だ。結果、捨てるはずだった命を拾うことになろうとも、虚無感は否めない。

部屋にはアリシアたちもいて、みんな思い思いに過ごしていた。

「あまり気の抜けた態度は関心せんぞベアト。我々の前ではいいが、少なくとも民衆の前では、賢者らしく振る舞っておくことだ」

「ええ、分かっているわ。分かっているけど……ねえ、分かるでしょう?」

我ながらハッキリとしない発言。

「まあ、そうだな……」

溜息を吐くかのようにシャルロット。

どうやら気が抜けているのは私だけではないらしい。

無理もないだろう。王都帰還からこつち、連日のように凱旋パレード、勇者一行のお披露目、祝賀会、戦勝パーティー、記念パーティー、パーティー、パーティー、パーティー、パーティー……で、心休まる時間もない。

「それだけの悲願であったということだ。私の祖国も、これでようやく浮かばれるだろう……」

「……そうね。でも、少しくらい私たちの心情も加味してよ——と思うのは、私の我侷なのかしら?」

「まあ、こればかりはな……彼らとて、私たちを苦しめたくてやっているのではない。私もかつては王家の人間だったから、それは分かる」



そんなものなのかしら——私はそう気だるげに言った。

「まあ、そんなパーティー三昧も今夜でおしまいね」

七日七晩続いた宴の会は、今日の夜を以て終了する。ようやく煩わしいきたりや挨拶といったものから解放されるが、それは同時に、私たちのパーティーもこれでお開きになるという意味を持っていた。目的が果たされた以上、もうこのパーティーを組んでいる必要性はない。

「シャルはこれからどうするの？」

何気なく私はそう訊いた。

少しだけ悩んでから、シャルロットは答えた。

「さあ……正直、この戦いの後のことは何も考えていなかったからな。そうだな……やはり順当に言えば、祖国復興を目指すべきなのかもしれんな。ベアトこそどうなんだろう？」

「私は……どうだろう……帰って修行のやり直しでもしようかしら。師匠とは結局喧嘩別れしたままだし……セーラは？」

「わ、わたしは！ 教皇さまにお願いで、この旅で得た知識と魔法で、人々を癒やしてまわりたいと思います！」

「そう……スゴイわねアンタ、もう前を向き始めてるなんて」

一番歳下だというのに、この子ったら大した精神力だ。こういった時、アイツならなんて言ってたかしら……えっと、確か『タフガイ』だったかしら？

「いえ、そんなことはありません……わたし、みんなと出会う前から『修行』と称してそうやって旅をさせられていて、だから結局、何も変わっていないんですよ……」

俯いてそう言うセーラ。

しばらく無言になる私たち。

あれから結局私たちは、誰も「前」に進めずにいた。

ずっと、私たちには『先』はないと思っていた。そんなものはありはしないのだと、私たちの誰もが知っていた。知っていながら、知らないふりをして、これまで前に進んできた。あの旅は、今思えばそういう旅だったのだ。

それが思いもかけず『先』が与えられ、私たちは生き残った。生き残ってしまった。

この残された命をどう使うべきなのか、私たちはまだ答えを見つけられていない。

「アリシアさんはどうですか？」

「……私？」

ずっと無言だったアリシアにセーラが話を振る。

相変わらず何を考えているか分からない顔だったが、アリシアはどこか決心したような顔をしていた。こう長いこと一緒にいれば多少なりとも表情が読めるというもので、

どうやらあの子はあの子なりに、何か「答え」を見つけたらしい。

「私は——」

アリシアの言葉は、王城の鐘に遮られた。

扉が開き侍女たちが入ってくる。恭しく頭を下げると私たちに向かつてこう言った。

「勇者さま御一行、お時間になりました……よろしければ、王家の間までおこし下さい」  
私は立ち上がり、仲間たちと共に部屋を出る。そのさい横目で見たアリシアの顔からは、さつき見せた決意の色は消え、いつもの無表情に戻っていた。

それから最終日の晩餐会も滞りなく終了し、途中王様の長々しい演説もあったが、疲労の溜まっていた私たちはロクに耳にも入らず、そのまま倒れるように部屋に戻って眠りについた。

そして夜は更け、朝になり、別れの時が来た。

旅立ちの日だ。

私は昨日の陰鬱な気分とは打って変わって、どこか清々しい気分だった。

私なりに答えを見つけたのだ。帰って修行をやり直すのもいいが、その前に一つ、やるべきことがある。

「これでお別れね……」

王都に帰還してきた時と比べ、旅立ちの時は静かだった。仲間、いや、かつて仲間だつ

た者たちだけの、寂しい別れ。

「みな達者でな」

想像していたよりも、別れというものはあつさりとしたものだった。もつとこう、お涙頂戴の感動的な別れがあるものだと思っていたけど、そういつたことを煽るヤツがここにいないせいか、何の感慨も湧いてこない。

「いつかまた、どこかで会いましょう」

まあ、こういった別れ方も悪くないと、私は正直に思った。何も今生の別れというわけではないのだ。縁があれば再びみえる日も来るだろう。

「……じゃあ、またね」

そう、私たちの間に別れの言葉は必要ない。再会の言葉だけを交わし、私たちは私たちの未来に向けて歩き出す。

歩き出して、歩き出して、歩いて歩いて歩いて、そして……

「……ねえ？ 何でみんなついてくるの？」

「心外だな、ついてきているのは貴公の方では？」

「わ、わたしも、実はこつちの方に用があまりまして……」

「たまたま」

そう口々に言う元パーティメンバーたち。

「いや、絶対にたまたまじゃないでしょ！ 明らかに『アレ』でしょ？ アンタたち『アレ』が目的でしょ！」

「なんかこう、囚われのヒロインを主人公が助けに行く感じのヤツ！ なんて言ったかしら、そうマリオ！」

「道理で寂しさなんて込み上げてこないはずだ。最初からみんな『コレ』を狙っていたのだ。どうして黙っていたのは勿論――」

「アンタたち、自分だけ抜け駆けするつもりだったでしょう!? そうはさせないわよ！」  
みんな黙っていただなんて卑怯だわ！

「ベアトの方こそ黙っていたではないか！ そんなことするのは下心があったからだ！ 人の事は言えんぞ！」

「うぐ……だいたいシャルは祖国復興するんじゃないの!？」

「無論だ。だがそれには協力者がいる。それに私の家は私を残し全滅してしまったから、建て直すには伴侶も必要だ。例えば強くて逞しくタフでナイスな伴侶とかがな」

したり顔で言うシャルロット。なんか無性にムカつく顔だった。

「セーラは!? あなたは癒しの旅をするって!」

「ええ、ですのでもずは真っ先に、わたしの癒しの力を必要としている人のところに向かうかなって……知ってました？ 傷ついたあの人を癒すのが、わたしの主な役目だっ

たんですよ？ そう、わたしだけのね、フッフ

「え？ え、ええ……そ、そういえばそうだったわね」

セーラがヤバい感じに笑っている！ あかん！ 地雷を踏んだかもしれないわ！

「じゃ、じゃあアリシアは!？」

空気を変えるため標的を移す。が、こいつも明らかに地雷なのだ。

「私は……あの人がパーティーをやめるのに、いいと言った覚えはない。あの人が勝手に言い出して、勝手に出て行っただけ。私はやめるだなんて一度も認めてない。だから迎えに行く。邪魔をするならベアトだって……」

「ちよちよちよちよっ！ 別に邪魔するなんて一言も言っていないでしょ!？ 落ち着きな

さいドウドウ」

「そう、ならいい」

もう、瞬間火力ではアンタはピカイチなんだから、ビビらせないで欲しいわ。

「あ、でも、アンタの場合は大丈夫なの？」

「何が？」

「何がって……ほら、アンタは私たちと違って『勇者』じゃない。王様とか国のお偉いさんとかその他諸々とか、色々あるんじゃないの？」

同じ『光の巫女』でも、やはり『勇者』だけは別格だ。特にこの王国ではそれが顕著

だろう。王家の人たちがそんな簡単にアリシアを自由にさせてくれるとは到底思えない。

英雄である彼女がそんなホイホイどこかに行ってもいいものなのだろうか？

「そう、だから『勇者』の称号は王様に返上してきた」

「はい？」

「ついでに『聖剣』も」

そう言つてアリシアが見せてきたのは、蒼天色に輝く聖剣ではなく、なんの変哲もない無骨な形の長剣だった。

「え、アンタちよつと何で？」

「そもそも『勇者』なんて肩書きがあつたからあの人が出ていった。そもその発端はこの『勇者』とかいう無駄に大げさな称号。闇の帝王が倒れた以上もう必要ない」

「だからつてそんなあつさり……」

呆れてもの言えない私に、珍しくアリシアが指を向けて声を投げかけてくる。

「ベアトは『賢者』」

それから指を動かしシャルロットに。

「シャルは『姫騎士』」

最後にセーラに向けて――

「セーラは『聖女』」

そう言った。

「じゃあ私は？」

勇者と言おうとしたが、私は声が出せなかった。だってこの子はもう……。

「そう、私はもう『勇者』でもなんでもない。ただの一介の冒険者。孤児院出身のしがないアリシア。今この中であの人と並び立てるのは、私しかない」

な、な、な……こ、この子やりやがったわ！ アリシアはアイツの格を上げるのではなく、自身の格を下げることによってアイツと同格になった!?

「なるほどその手があったか」

ポンつとシャル。

「ムムム、やりますねアリシアさん」

と悔しがるセーラ。なんだか嫌な予感がするわ。

「ならば私も今日より『姫騎士』の称号を取り下げよう。元より国は滅んでいるし、既に無用の長物だ。それに、こういった道もアリかもしれないしな」

「では私も『聖女』と名乗るのは金輪際止めじますね。元々教皇さまに無理やり与えられた称号ですし、手放すのに未練はありません。むしろこれで肩の荷が下りるといってものです」



「いや、アンタたちそれでいいのかよ!？」

「うむ。父上や母上には申し訳ないが、騎士としてでなく、一人の女として生きていくのも悪くない。いやむしろイイ。亡くした祖国の代わりに、私は『幸せな家庭』という『王国』を築こうじゃないか!」

「聖女つて正直色々と面倒なんですよね。こうメリットよりもデメリットの方が多いうか、戒律や禁則も多いですし、ぶつちやけ言つてこつちから願ひ下げです」

あんまり聞きたくなかつた仲間の本音を聞いちまつたよ!

「ずるい二人とも、それ私の真似……」

ほら、アリシアさんめつちやご立腹じゃないですか! アレグ火山並みに噴火寸前だよ! オイ、こんな時に役立つはずのアイツはどこ行つた!? 行方不明だよツ!

「ごめんねアリシアちゃん。お詫びにまた私も一緒に歩いていくから」

「……本当?」

「うん! アリシアちゃんとのなら道中あんぜ……じゃなかつた楽しいし、きつとあの人も簡単に見つかるよ」

「ならば私もお供しよう。旅は道連れ世は情けとも言ふしな!」

「……ありがとう、二人とも」

ああ、格も美しきかな女の友情。かくして四人の絆は再び結ばれ、失つた五人目の仲

間を求めて決意を新たに旅立つ……つてちよつと待て、待つてよ！ 置いてかないでつてば！

「分かった、分かったわよ！ 私も！ 私も『賢者』やめる！ やめるから、置いてかないでよー！」

そもそも私つてば賢き者つて柄じゃないし、どちらかといえば大魔道士とかそつち方面の方がお似合いというか……つて悪かつたわ、ハイ、ちよつと調子に乗りました！  
もうただの魔法使いでいいから、だから置いてかないで！

「はあはあはあ、アンタたちつて、案外鬼畜なのね……」

「まあ……」

「何というか……」

「お約束？」

「何よそれ訳わかんないわ……魔法使い系は体力ないの知つてんでしょ……でも、あはは、なんかこういうのも悪くないわね……あはははは」

それから私たち四人は、何が面白かつたのか分からないけど、お互いに互いを笑い合つた。なんだか初めて心から笑い合つた気がする。まるで憑き物が落ちたような気分だつた。

「というかアンタたちみんなして、アイツが生きていることに一切疑いが無いわね？」

「まあ、彼だしな」

「あの人のことですし」

「私は最初から疑ってすらいなかった」

「まあ、確かにアイツのことだもんね……」

きつと今頃どこかでのうのうと冒険しているに違いない。

「でもアテはあるのか？」

とシャルロット。

「ない」

答えるの早すぎよアリシア。アイツの悪いところばかり似ないでちょうだい。

「実は私も見当はあまりなくて……」

ふっ、薄々そうだろうとは思っていたわ！

全く、肝心な時にいつも頼りにならないヤツらなんだから……仕方がないわね、どうやらここは、元賢者のベアトリースさまの出番のようねって、ごめんなさい、はい言います！ 言いますから、そのヘッドロックを外して下さい！

「はあ……アテならあるわ。いい？ アイツはあの時、『西』に抜けていった。私たちもあのあと『西』に向かい、それから闇の帝王の居城で私たちは引き返したけど、あのアホならそのまま進んでいった可能性が高いわ。『北』と『南』は念入りに調べたし、道中

すれ違うこともなかったしね」

「というか、十中八九そうだろう。あのバカなら、あのまま何も考えずまっすぐ進んで行ったに違いない。あの前に進むしか能のないアホウなら……」

「『西』か……長い旅になりそうだな」

「ええ、そうですね」

「問題ない、私たちならできる」

「ええ、行ってアイツにガツンと言ってやりましょう」

「やっぱり、私たちのパーティーをやめて野良になるのは許さない」  
「つて！」

かくして、私たちの冒険の日々は「再び」始まった。